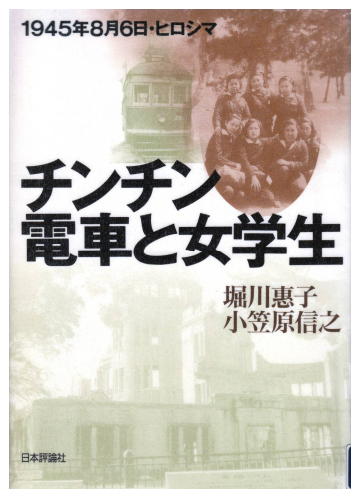


チンチン電車と女学生

昭和20年、広島に原子爆弾が投下されたとき、路面電車を運転していた女学生たちがいた。戦争に、男たちがかり出されてしまい、運転手が足りなくなってしまった。そのころ、広島電鉄では、働きながら勉強できる家政女学校をつくり、女学生を募集した。しかし、授業が行われたのは、始めの半年間ぐらいで、女学生たちは、すぐに車掌や運転手として働くことになった。



チンチン電車と女学生
堀川恵子・小笠原信之 著
日本評論社 発行

電車の中で演劇公演！

今年、豊橋空襲と同日の6月19日（土）、20日（日）の2日間、豊橋市内を走る市電の中で、公演が行われた。

『2010年、走るチンチン電車の中で65年前の女学生たちの物語に出会ってほしい。過去の物語ではなく、いまだ核兵器を廃絶できない私たちの物語として。』



狭い電車の中ではあったが、5名の劇団員により、熱演が繰り広げられた。さながら市電の中は、昭和20年の8月6日にタイムスリップしたかのようであった。

あの子たちは、6年前からずっと俺たちに叫んでいる！」

臨場感のある舞台であった。



広島にチンチン電車の鐘が鳴る
きむらけん 著
汐文社 発行



次いで ナガサキにも

『この子を残して』永井 隆

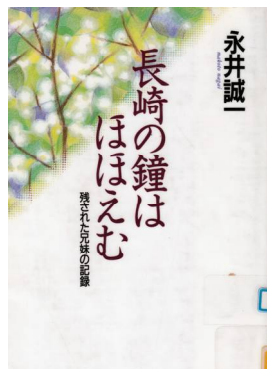
この子を残して—この世をやがて私は去らねばならぬのか！（中略）

長崎で原爆にあい、放射線を浴びて不治の原子病患者として床にふす父親と、二人の幼い孤児予定者。この三人が生きてゆく正しい道はどこにあるのか。（中略）

何か人に知られたくない小さな宝物をこっそり楽しむように、カヤノは小声で、「お父さん」と言った。

それは私を呼んでいるのではなく、この子の小さな胸におしこめられていた思いがかすかに漏れたのであった。

—本文より抜粋—



息子：永井誠一の著書
女子パウロ会 発行



父：永井 隆の著書
サンパウロ館 発行

長崎医科大学の永井博士は、長崎で被爆した。妻も亡くした。二人の子どもは、ちょうど長崎を離れていて無事であった。しかし、永井博士は、病気が徐々に重くなって、床に伏すようになった。

それでも、親として精一杯の愛情で子どもたちを見守り、育てるのであった。親としての切なさ、やるせなさがひしひしと伝わってくる。

『娘よ、ここが長崎です』^{カヤノ}筒井茅乃



娘：筒井茅乃の著書
くもん出版 発行

著者は、永井博士の娘— 寝ているお父さんのほほに自分のほほをくっつけて、小声で「お父さん」と言った— カヤノさんである。

自分も母となって、娘を持ったカヤノさんは、娘を長崎に連れて行った。被爆 40 年目に平和の尊さを娘に語り伝えるためである。それまで、カヤノさんは、当時のことをほとんど語らなかった。ふれたくない気持ちと、何からいってよいか、幼い娘を前にして、ことばで言い表せないという思いがあった。

カヤノさんは、父の最期に寄り添ったときのことを次のように語っている。

「がんばりぬくことのだいじさを、身をもって教えてくれた父さん、ほんとうにご苦労さまでした。ありがとう。わたしたちもがんばります。」二度と、このように人を殺す、おごいあらそいをしてはならないと、一生懸命書き続けた父の右手は、白い色になってきました。

—本文より抜粋—